

りに、くさくさの繪を彫られて、墨くろくさくとみゆるに、青く赤く色どりなどして、父母の遺體を  
きざみて風流する、あさましき事なり、こは文身といひて、から國人もいやしむる事ぞかし。

〔廓の夢〕忠、まじつその氣でありや、直に翌旦居續して、初會馴染も迷情やうだが、梅川に膽を  
潰させて、やりてへ、舞、モウろふ何もかも、打あけて申し、うへからはどうとも主の心まかせ  
に成イせうが子、これ迄、主も梅川さんの所へ、お出なんして、まア浮名も立なんす程の中で、おざ  
りいすものを、定めてお言ひかはしなんした事も、たんとおざりいまいし、恍惚したうへじや、  
ほり物も致イすやうな事が有イすが、若しひやつと、そんな事でもおざりいす譯なら、主も隠さ  
ずに、いつてお聞せなんし、忠、成程おめへのすいりやうの通り、ほり物もして居やすが、そりや、  
今にも消して仕廻やす、舞、そんならきれへに消てお仕舞なんすかへ、忠、知れた事、あいつが名  
を火あぶりにしても、未わつちが腹は愈せん、略○中、これより忠兵衛は、もぐさをもつて、腕のほり  
物、梅川が名を焼消す、

〔嬉遊笑覽容儀下〕游俠を好む惡少輩、文身すること、事物紀原に、今世俗、皆文身、作魚龍、飛僊、鬼神等像、  
或爲花卉、文字、舊云、起於周太王之子吳太伯云々、史記越世家言、夏后帝少康之庶子、封於會稽、文身  
斷髮、披草萊而邑、證此則是茲事爲始於帝少康之子、因知文身斷髮之爲吳越之俗也、舊矣、また高士  
奇澹人が天祿識餘に、唐之中葉、長安惡少、多以詩句、錢、涅肌膚、誇詭力剛、坊間遠近、效之成習、後皆爲  
薛京兆元賞杖殺、更有取名賢詩中意、細刺樹木人物、至有周身用白樂天詩意、刺涅人呼爲白舍人行  
詩圖者、雜俎統名之曰割青云、こゝには天正文祿の頃、異様の出立する惡徒も多かりしかど、文身  
のさたも聞えず、其後種々の俠客有しも、猶その事見えざれば、専ら行はれしは、いと近きこと、  
みゆ、關東俠客傳に、淺草神田川に、鐘彌左衛門といへる者、極めて立派なる男の、其頃までは入ほ  
くろ大きなるは、珍らしかりけるに、横筋かひに肩より南無阿彌陀佛と大文字に彫付たりと、頃其